
天地物語

重装改

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天地物語

【Nコード】

N6167Y

【作者名】

重装改

【あらすじ】

いつか、どこかでさらなる技術的進歩を遂げる事ができた人々と、できなかった人々のお話です。

初投稿ですから文章に粗が目立つかもしれません

その時は是非ご指摘お願いします

プロローグ

いつの時代ともわからないいつか、人は様々な技術を産みだした。

大陸サイズの人工島を浮かび上げらせるほどの反重力エネルギー。太陽光と定期的なメンテナンスだけで半ば永久的に食料、エネルギーを生み出してみせるプラント施設。

これら以外も含めた様々な技術は生活に転機を与え、医療面でも反老化カプセルを始めとした恩恵により平均寿命はさらに高齢化した。

これらを手に入れた人々はまさにこの世の春を謳歌したといえよう。

しかしこれらの技術は、軍人将校、政治家やそれに追隨する職業に就く者、高所得者等の特権階級に独占された。

その他の人々は変わりないどころか、むしろ参政権を始めとする様々な人権の事実上の消滅でそれによる治安の悪化が深刻化した。

何より反重力エネルギーの発生時に老廃物、通称 黒い雪 による環境汚染等による生活圏の縮小で今まで以下の生活を余儀なくされていた。

そんな中、一人の学者が駆動システムの革命になりえる物を開発した。

物語は、その評価試験に呼ばれた人々を載せたシャトルに焦点を合わせた状態から、始まる。

一話(1)

何の変哲も無い旅客機が、空を飛んでいる。いや、正確には着陸のために降下を開始していた。

乗客の顔ぶれは三十代、四十代が二、三割、残りは十代後半に見える人々が占めている。

彼等に共通していることは緊張と不安が入り乱れた形容し難いピリピリとした雰囲気、そして胸に付いた 天上の人、つまり特権階級を表すバッジである。

一方、同時刻

その旅客機を見上げる二人の人物がいた。

片方は肩までかかる髪を後ろで束ねた背の高い青年、もう片方は金髪と黒い肌が目を引く中肉中背の少年といったところか。

「博士、質問です」

少年が青年（どうやら博士と呼ばれている）を見上げて言った。

「これから来る人って100人ちよつとであつてますよね？」

「そうそう。君と同じ年頃の子達はだいたい70人かな」

博士は少年に笑いながら返す。

「全員、適性も君より上だ。それで、どうしてまたそんなことを？」

少年は頭を軽くかき、（ばつが悪いか恥ずかしいかの時に少年が無意識に行く、一種の癖である）これまた少し恥ずかしそうに答えた。

「いや、そういうわけじゃなくて、えっと…俺は 下の人 だけど、その人達と仲良くなれるかな、なんて」

「つまり、差別されるのが、怖い」

「ええ、まあ…」

博士は、少し考え込んで答えた。

「わからないな、ただでさえ特権階級とただの人だ、さらにさつきも言った通り、

彼等と君とには歴然とした才能の差がある。でも」

「でも、何です？」

「天上の人といつても人間さ、全員が選民思想ではないかもしれない、そうであるべきだ」

少年はそれを聞いて少しだけ気持ちが落ち着いた。

博士のこの言葉は何だか博士自身に語りかけている風にも見え、少年は博士のそういつた口ぶりは幾度と無く見てきた。しかし、たとえリップサービス程度でも、言葉を投げ掛けられないよりはずっと幸せに違いないと考えた。

これは少年の持論でもある。

「おや、着陸したね。行こうか」

「は、はい」

返事をしながらも手の震えが止まらない自分を少年は非常に情けなく思った。

反重力装置から排出される有害廃棄物、通称 黒い雪 のせいで地上に住むことを余儀なくされた人々は、シエルター兼居住区として巨大なドーム内に生活に必要な全てを詰め込んで閉じこもることを選んだ。

しかし、ドーム自体の維持費が馬鹿にならなく、またそのような閉鎖空間で出来る産業などたかが知れている。

結局彼らは天上の人に頼らざるを得ず、両者の立場の差は開き嫌悪感深まるばかりであった。

旅客機は、島の海沿いに位置したドーム内に着陸した。

といつても、まずは 黒い雪 処理として旅客機全体の消毒作業がある。そして乗客にも厳重な処理は行われる。

結局、乗客達がロビーに解放されたのは着陸から30分以上後のことだった。

ドームの外壁と内壁の間の半ば儀式と化したこの洗浄時間。

天上都市民にとってはドーム民に一刻かしまることを強制されているような不愉快な時間。

また、ドーム間の交通や運送すらほぼ不可能なドーム民にとっては、洗浄用の水を初めとする貴重な資源や資金を捨ててまで憎い天上都市民を招かなくてはならないという腹立たしい時間であり、このような状況はドームと天上都市の関係が全く好転しない一因である。

旅客機にいた中の半数ほどがそういった不愉快な感情を抱いた頃に、博士と少年がようやく到着した。

一話(2)

向かってきた二人が博士と少年である事がわかると、百数人の先頭から三十代そこそこに見える男が前に出た。

「桜田です。芦岡博士で間違いありませんね？」

「はい、よろしく願います」

お互いに軽い挨拶を交わすと、桜田と名乗った男が博士に不安げに質問した。

「博士」

「…何です？」

「そちらの子供は？」

博士は桜田の手の先の少年を見て、ああ、と納得したように声を出した。

「彼は、今回の計画で先だって試験に付き合ってくれたのです。名前は…」

そこで博士は急に口ごもる。心なしか視線も泳いでいる。

「…博士？」

「いや、ちよつとお待ちを。」

博士は桜田に背を向け少年に向き直る。

「そういえば俺は君のこと名前で呼んだこと無いな？」

「そりゃあ、名前ありませんし」

「……そうだったけ？」

「博士も博士ですよ。俺と博士の二人つきりが十年続いたからって、何も全部 おい だけですませなくても。なんなら、今にでも付けちゃいます？」

あつけらかんという少年をよそに、博士は頭を悩ませていた。

「名前、名前ね。そうだ、せっかくだから おい をなまらせて口イでどうだ？」

これに少年、

「ああ！いいですね、ロイ。」

目を輝かせて実に嬉しそうに賛同する。

「ふふふ、そうだろう。たったの二文字で覚えやすい。」

「あの、博士そろそろいいですか？」

「えっ？ あ、っと」

博士は、桜田に声をかけられてやっと頭の中で自分の来た理由まで話を戻す。

「コホン、と、とにかくテストパイロットを担当してくれたロイ君です。」

「よろしく申し上げます」

「は、はあ……」

唖然とする桜田をよそに、博士は明らかに自分を変なものでも見ているような目で見ながら、ヒソヒソと話をしている人ばかりを見つめると、再び視線を桜田に移してズイツと詰め寄り、小声で不満を漏らした。

「しかし、桜田さん。事前に伝わったから何とかかりましたけれど保護者用にSPが同伴するだなんて、遠足じゃあ無いんですから」

「す、すみません。これでもだいぶ減っているのですよ、ただ、さすがに自分は権限が低くてですね……」

桜田は急に真面目な話、それも自分にとって痛いところを振られて苦い顔をした。

そうでなくても彼と長身の博士の身長差は十センチ近くあるため、ズイズイ寄られるのはあまり気持ち良いものではない。

「いえいえ、こちらこそ。そろそろ移動しましょう、これ以上待たせると皆さん、アレですから」

博士は彼の内心を知ってか知らずか、申し訳なさそうな顔をして深々と頭を下げた。

「そ、そうですね」

桜田は話を長引かせた元凶は博士であることを指摘したかったが、それこそ面倒なことになると判断し、人だかりに向き直った。

「では皆さん、こちらです」

桜田、博士、ロイを先頭に約百人が目的の施設に向かうためリニアレールに乗る。

レールはドームの内壁に向かって移動を開始し、何かあるたびに桜田がドームの構造についてのウンチクを語っていた。

博士にはあるものと無いものがある。

あるものとは発想力。

無いものとは金とコネと交渉の才能や常識、その他諸々である。

（今自分がこうやってドームで研究をできるのも、こういう人達の財力や桜田さんの根回しのおかげ。無茶への妥協はやむを得ない、か）

ほとんど誰も聞いていない解説を何故かしている桜田を見ながら、博士は色々思いの詰まったため息をついた。

一話(3)

そしてリニアは遮断層を抜けてドームの中に出た。

ドームの中では比較的小型だが、それでも東京都の市区部ほどの直径のドームの中には建物が並んでいた。

それはまるで「野球」のドームを二、三個並べたほどの敷地分はあった。

(なお、野球自体は黒い雪とそれ対策のドーム社会によって都市間の長距離移動が困難になったなど、悪条件の重なりで非常に残念ながら廃れてしまった)

しかし、それ以外には緑地以外は更地や岩山が広がっているだけで、どちらかと言えばそれしかない、といった感じである。

「ああ、説明いたします。このドームは元は皆さんのレジャー施設等の建設を目的としていましたが、浮上都市のライフラインの確保に伴い不要と判断され放棄されていたところを…」

当然、仮にそんな物が出来ていたらドームと天上都市の全面戦争が起きただろう。

博士は、桜田がある種めちやくちやな光景に目を丸くしていた人達に説明しているのをすぐ隣でぼんやりと聞いていた。

だが、これまたすぐ隣のロイがやけに神妙な顔をしているのに気づき、軽く声をかけた。

「ロイ、どうした？」

ロイはよほど深く考え込んでいたのか(それとも、さっそく名前を忘れたか)全く反応が無かったが、もう二、三回呼びかけてようやく気づくと、やや恥ずかしそうに頭をかきながら答えた。

「その、迎えに行く時と思いましたけどドームって広いですねえ」
博士はそういつてため息をついたロイに少し笑いながら

「君、ドームなんかを広いと言ってしまったら地球を見たときひっくり返るぜ?」

と返したものの、ロイを施設の一つのブロックから十年間出して
いなかったのは他でもない自分だったことを思いだした。

そしてロイの態度に内心で舌を巻きつつ、そんな自分の無頓着さ
がロイをこんな風にしてしまったと考え、少し嫌な気分になった。

「あのさ、ロイ」

彼はせめて何か言うべきかと思って一声かけようとした。

「つきました。保護者の方は会議室で博士と私から今後の説明をい
たします。えっと、試験に付き合っただけの生徒だから……うん、被
験生はこのロイ君についていって寮の入口まで向かって下さい」

桜田とリニアに完全にタイミングを持って行かれた。

「さあ博士、行きますよ。どうしました？」

「いいえ、何でも」

桜田を尻目に腕時計を見て、相手方のスケジュールもあるかな、
と考えた博士はロイのことは残念に思いつつひとまず置いて会議室
へ向かうことにした。

会議室では博士と桜田が、半ばおさらいに近い形で保護者方に説
明をしていた。「パンフレットを読んでいただいたように、私が研
究しているのは、人と機械の一体化です。といっても詳しい話
は直接見てもらってからの方がいいかも知れませんね」

そういつて博士はそばに置いていたヘルメットを被り、すぐ隣の
部屋までの敷居を桜田に外してもらった。

そこにはトラックより大きそうな腕があり、それを見せると、
頭頂部から出ていたコードを何本かを端子に繋いだ。

「では、いきますよ……！」

自身の手を強く開いて、握るといふ動作を繰り返した。
すると、

『ギギッ、ギギギギ……』

と駆動音を鳴らしながら腕の手もほとんど同じタイミングで
それに続いてみせた。

「ハア、ハア、ハア……まあ、こんなところですね」

と、博士がやや疲れた顔をして振り向いたのと保護者席から、お
おっ、と驚きの声が漏れたのも、これまたほぼ同時だった。

一話(4)

博士が保護者に 腕 の動きを見せていた頃、ロイは地図を片手に被験生の先頭で寮へと歩みを進めていた。

「あつと、ここは曲がるのか。桜田さんてば、人が言う前に博士連れてっちゃんだからさ」

「なあ」

「えっ?」

ロイが地図と睨み合っつてうんうん唸っているところに、一人の青年がやや小声で話しかけてきた。

少し赤が混じった黒い髪と白い肌、赤みがかった瞳が特徴のその青年はロイと地図を交互に見比べてやや不審そうな顔をしていた。

「お前、さっきのテストパイロットだろ?」

「えっ、ああ、そうだよ」

「もしかして道を忘れたとかか?」

「えっ! ああ、うん。ここは初めて来たからなあ」

「初めて、ねえ。テストパイロットなの?」

ロイの挙動不審な様子に青年は興味を抱いた風で、またそんな青年の興味深そうな態度にロイはさらに戸惑った。

「いや、パイロットだからって行ったことのないのはどうしようもないよ?」

ロイが思い当たる限り至極真つ当な返しをし、とりあえず話題を終わらせようとしたところ青年は

「…ああ、それもそうか」

と、思いの外にあっさり食い下がったので、ロイは安堵するやら気が気でないやらでますます緊張した。

「まあ、そんなに入り組んでないから問題は無いと思うよ。……たぶん」

「信用ならないな、どれ見せてくれよ。って今この辺なのか。なら

「1分もしないで到着するんじゃないか」

「あっ！そうだね。地上と地下で縮尺違うのかなあ」

「地、なんだって？」

「い、いやあ何でも！ あ、見えてきた、あれじゃないかな」

「？ まあ、いいけど」

寮は、一目見た限りは三階建ての何の変哲もないホテルかアパートといった感じのものだった。

しかし、

「誰もいない？」

掃除された痕跡はあるものの、人の気配は感じられなかった。

「みたいだね。おや、何かロビーにあるぞ」

そういつて青年が向かったロビーには箱らしきものと、それを矢印で指して『一つ引いて下さい』という文が書かれた建物の見取り図があった。

「くじ引きか？」

「くじ？ ああ、博士から聞いたことがあるぞ。でもなんで今くじ引き？」

「たぶん部屋でも決めるんじゃないかな。さて、よいしょつと」
青年は箱の穴の中に手を突っ込み、3a と書かれた小さい玉を一つ取り出した。

「ふむ、3aね。よし、お前も一つ取り出せよ」

「えっ？ ああ、わかった」

ロイは青年に続いて箱から玉を取り出した。

「3cつて書いてある」

「ふうん」

「ああ、同じ部屋じゃないか」

「ホントだ。よろしくな、パイロット君。」

「よろしく、んっ？ 『くじを引いた人は番号通りの部屋の中でお待ち下さい』、だってさ」

「なるほどね。ちょうど長い道と若干頼りないガイドのせいで疲れ

ていたところさ。どね、ちよつと部屋を見てみるか」

「そうだね、俺も見してみたい」

青年が皮肉を言ったことを知ってか知らずか、ロイも後に続いた。

一話(5)

青年とロイが入った部屋は、二段ベッド二つ、バスルームに洗面台と良く言えばシンプル、悪く言えば殺風景なものであった。

「ベッドが四つなら、あと二人つてことかな」

「さあね、くじは俺がa、お前がcだから最低あと一人は来るな」
「なるほど」

そう軽く雑談を交わし、互いにとりあえず残りを待つことにした矢先。

「やあやあ、なかなかどうして殺風景ですね」

「まあ、わ……コホン、僕にはこれくらいがちょうどいいけれど」
開け放したドアから、背が高いのが一人と低いのが一人、計二人が入ってきた。

「おや、いらつしやい。これからよろしく」

「あつ、よろしく」

間髪入れずに挨拶した青年に続きつつ、ロイは入ってきた二人をそれぞれ見比べた。

背が高い方は金髪を耳ほどで不恰好にならない程度に切り揃えた、空色の瞳をした青年。

低い方は、黒い髪を後ろでまとめていて(博士と違って前髪はそのまま、後頭部で縛った感じ)何となく丸みを帯びた顔立ちが中性的に思わせる少年だとロイは思った。

「別に、仲良くはしたいけどさ」

少年の方が口を開く。

「僕は今のところ、ここにいる全員の名前を知らないのだけれど」
「ああ、なるほど、確かに名乗っていなかった。」

少年に赤みがかかった黒髪の青年が相槌を打ち、では俺から名乗るよ、と皆に確認をとった。

「じゃあ、言うぞ。俺はオニクス、オニクス・ブラッドレイ。これ

からよろしく！」

それに金髪の青年が応じる。

「僕はケイズ・エイワスです。口数は少ない方ですが、まあ仲良くやっていきましょう」

「わ……僕は宇佐美・駿河つひみ・するがだ。よろしく」

オニクス、エイワスに続いて少年が名前を名乗り終えて、いよいよ自分の番かと意気込んだ直後、ロイは妙な違和感を覚えそれをおこなった。

「みんな、名前長いな？ 特にオニクスブラッドレイなら十文字もするじゃあないか」

ロイを除く三人と周囲の空気が固まった。

（えっと、うん。……うん？）

（ちよつと何を言いたいかわかりませんね）

（これは素なのか？ ボケなのか？ わ、私には察しかねる）

三者それぞれ、だいたい同じことを考えて静寂が生まれてしまっただが、居心地が悪いのか空気を讀んだのか、とにかく駿河がロイに質問することで切り抜けようとした。

「姓名とか、ファミリーネームと違って、わかるか？」

「？ 何だい、それ」

再び静寂。

「あ、ああ知らないのか。いやあ別に悪い事ではないんだ」

「うん。そのファミリー……？」

「ああ、ようするに、家族としての名前というか、何というか……ええい、エイワス君頼む」

「いや、駿河さん。僕の家はいろいろややこしいのでここはあなたが」

「奇遇だな、私も色々ややこしい家庭なんだ。じゃあオニクス君、がんばれ」

「お願いします」

「なんちゅう理屈だ！ だいたい、わざわざ自分の家庭の話を詳し

くやらんでも、適当に話せばいいじゃないか」

「……！」

驚愕するエイワスと駿河。

(こいつら絶対アホだ……)

そして頭を抱えるオニキス。

「まあ例えば、俺のフルネームはオニキス・ブラッドレイでオニキスは俺の名前だがブラッドレイは、家族の名前ってやつだ。例えば俺の親父はガーネット・ブラッドレイ。自分の名前がガーネット、家族の名前がブラッドレイ……わかったか？」

「まあ、たぶん」

オニキスは一応ホツとため息をつきつつ、なんでこんなアホ共に一喜一憂しなければならぬのかと軽く自己嫌悪に陥った。

と、その時オニキスはそもそも彼の名前を聞いていないのを思い出した。

「そういえば、お前はなんて名前なんだ？」

「えっ？ えっと、あー、うん！ 思い出した、ロイだよ！」

三度、静寂。

「あー、えっと、思い出す……？」

「いや、ハハハ、さつき名付けてもらって置いてすぐ忘れるのも変な話だな。いや、でも違うんだ！ 皆の案内やらいろいろ忙しかつたじゃないか、結構時間もたつたし、ねえ？」

腕時計をチラチラ見ながら論点からズレにズレた弁解をするロイに、同時に三人が啞然とした。

「……さつき名付け……え？」「……」

「そう！ まあ仕方ないんだ、これは……」

再びロイが弁解を続けようとしたが、その時オニキスが形容し難い物を見たような顔をしながら遮った。

「もういい。その、何というか、流れについていけない！」

「あー、オニキス君に賛成です。ひとまず他の話をしましょう？」

「……うん、そうだ、駿河やエイワスにだって聞きたいことはある

さ

エイワスに促されてオニキスはひとまずロイから視線を逸らしたが、視線に重なった駿河を見てふと気になったことを思い出した。「ところで駿河、お前一人称が『私』になつてたぞ？」

「えっ。こ、これはあれだ、うん！」

「いや、どれだ。」

「さ、さあわからないな。そういえば、エイワスってどこかの軍事メーカーだった気がするな。何かしら企みでもあるのか？」

「ええっ！？　そ、そんな人聞きの悪い！」

駿河は悪あがきでエイワスに無茶振りするも、エイワスの慌てぶりからしてだいたいあつていらしい。

「そんなこと言ったら、ガーネット・ブラッドレイといえば、反重力ユニットの小型化とその浮上、生産の阻止に血道をあげていると聞いたような気がするが、この試験にそれらに関する利権でも絡んでいるのかな？」

「親父の話はやめてくれないか！　それとエイワス！　なんかもう敬語抜けて地が出てるぞ！」

四人が室内に揃ってからおよそ五分。

（（厄介な奴と同じ部屋になつてしまった……！））

早速、それぞれに警戒心を抱いた三人だが、考えてることはだいたい同じであつた。

「どうしたんだ、三人とも」

「……もういいよ、お前は！」

全く話についていけなかった一人を除いて。

一話(6)(前書き)

お詫び

改行後一文字目の一字空けや三点リーダー)『…』という記号です)の使い方間違い、その他諸々にあった初歩のミスを気づいた範囲で手直ししました。

今までこころした基礎に全く気がつかなかったのは非常に恥ずかしいことだと思えます。

今後このような事が無いよう気を引き締めていきます。

一話(6)

「さて、皆さん」

時間は博士が 腕 を動かして見せた頃までさかのぼる。

博士は机から、ゲル状の半液体、金属光沢を放つ液体、そして澄んだ緑色の液体の入った小瓶を取り出した。

「このゲル状のものは医療用ナノマシンのホルダーみたいな物で、こちらは皆さんご存知水銀です。そしてこいつは…まだ秘密です。」

そして、透明な 腕 (サイズは人の腕そのもの) を取り出し、カメラでその様子をスクリーンに映した。

「はい、こちらは水銀とナノマシンが入っています。当然、ナノマシンと水銀ごときでは、何の反応もございません」

腕 に手をかざすなり叩いてみるなりして何も起きていない事を見せ、手に持った小瓶をカメラに寄せた。

「これを入れてみましょう」

腕 の小さな蓋を開け、小瓶の中身を全てほうり込み蓋をしてさっきのコードを繋いだ。

「それでは、グー、チョコキ、パーの順番で動かしますから、よく見てくださいよ」

博士は深呼吸してから、 腕 を見つめた。

すると、 腕 は博士の宣言通りに手の部分でグーチョキパーをゆっくりと、しかし連続でかつ正確に作った。

「人は筋力や知力以外に様々な力を持っています。例えば、集中力と想像力。これは視覚化しにくいものですが、確かに存在しています」

博士は自分の頭を人差し指でコンコンと小突いて続ける。

「仮にこれらを違うエネルギーに変換出来たならば、いかに便利なことでしょうか。人の想像力は底無しです。もしも、もしもこれをエネルギーとし、モーター等も組まずに稼動するならば、……これは

ある種の永久機関です」

言い切った博士は先程から目を離さずにまじまじとこちらを見て
いる人々に、身振り手振りを大袈裟にして高らかと言い放った。

「これが、これこそが、その永久機関です！ 想像力で動く金属塊、
私はこれをイマジネーションでは語呂が悪いので、『I・M』（イ
マジン・メタル）と名付けました！」

ざわめきを背にモニターに向き直った博士は理科室の人体模型の
ような何かを映した。

「これはI Mの内部図解です。パイロットには人間でいう心臓部で
操縦をしてもらいます。」

I Mの内部図解。

それはまるで人間から内臓と神経を除いた、つまり骨格、間接、
筋肉、血管の数々であった。

「皆さん……想像して下さい。この十メートル強の金属塊は、たっ
た一人の人間の想像力、そしてこの混合物で歩き、走り、跳びはね、
泳ぎ、物を持ち運び、そして引き金を、引くのです……」

そして会議室は静寂に包まれた。

聴こえる音はきぬ擦れと唾を飲み込む音ぐらいである。

しかしそんなことはお構い無しと言わんばかりに、少し焦りを抱
いた顔の桜田が博士に小声で話し掛けた。

「……博士、いいムードの中アレなんですけれど、時間押してます
ので巻きをお願いします」

つい今までどこか陶醉している様に、しかし聴くものを引きずり
込む様に語りかけていた博士だが、桜田に声をかけられると途端に
普段の何だかやる気のなさそうな顔に戻った。

「うん、そうですね。あんまり早水のマネをするのも嫌ですし」

「早水？」

「こつちの話です」

そして人々に向き直る。

「つまり。この 血管 には先程の混合物が絶え間無く流れていま

す。こいつが 筋肉 に刺激を与える事により、さっき申し上げた様な多彩な行動を可能とするのです」

「やっつけになってませんか？」

「巻きで行きましょう、桜田さん」

桜田はキツパリと肯定した博士のその潔さとも言い難い何とも間の抜けた感じに、そういえばこんな人だったと苦笑いするしか無かった。

が、それと同時に博士が参考にした『早水』という人物に少し興味があったのであった。

一話(7)

視点は再び寮の一室に戻る。

相変わらず睨み合っていた三人だが、観念したのか、それとも何か企んだのか、とにかくオニキスが口を開く。

「コホン！ まあ、なんだ。いつまでもこんな感じじゃあ埒が明かない。この際、各々の立場を明らかにしようじゃあないか」

「えっ」

「いや、ちよつと待っ……」

オニキスは二人が何か言う前にさっさと語りだした。

「ただ今、親父とは仲が悪くてな。今回のコレも実験だから半ば無償だし、向こうにずっといるのも居心地悪くて来たわけだ。……ただ、それでも親父は尊敬してるんだ。話題ずらしとは言えあんな言い方は好きじゃないな」

言い終えた後、オニキスはエイワスにチラリと視線を注いだ。

「あっ！ す、すみません……」

「いや、構わない。ただ、この際だからエイワスにも色々話してもらおうかなあ、つてな」

慌てて頭を下げたエイワスに、オニキスは少しだけいやらしい笑顔で顔を浮かべた。

「はあ……。そういう風に話されて僕が言わないのは、空気が悪くて嫌なんですよ」

「だろうと思つたよ」

本当に申し訳なさそうなエイワスに、オニキスがニツと歯を見せて笑う。

「ひどい人だ。……父さんの頼みがあつたんですよ、俺によく似ている奴がいるから、どんな奴か見てきてくれ」つて。内緒にしたかったのですが」

エイワスがため息をつくとき、一応は話を聞いていたロイが三人の

間にひよっこり首を出した。

「ちなみに、その『似ている奴』って、誰なんだ？」

エイワスは、ふと固まったように口の動きを止めたが、やがて重々しくそれを開いた。

「それが、何の因果か、ロイ君、まさしく君なんですよ」

エイワスは、困ったように苦笑した。

「お、俺か……」

ロイもロイで、鏡に映る自身の中途半端に伸びっぱなしの金髪と浅黒い肌を見つめ、その後にはエイワスの短めの金髪と白い肌にまじまじと視線を送る。

「お母さんの血が、強いんだなあ！」

一同、ずっこける。

「……まあ、そういう事にして下さい。さすがにこれ以上は、ノーコメントです」

エイワスは、軽く笑ってから駿河に瞳を向けた。

「え、えと……その……」

駿河は途端にまごまごし出した。仕種が一々女の子らしい。

「わ、僕は何も隠して無い！……という事にしてくれ、頼む。この通り！」

突然、彼（？）が床に突っ伏した。土下座というやつだ。

「頼むよ……少なくとも、君達に危害があるわけでは無いんだ」

「……仕方ないなあ。そこまで嫌がるならさすがに俺もどうしようもない」

「僕も、何も聞きませんよ」

オニキスもエイワスも、笑って受け入れた。ただし、オニキスの瞳がカモを見つけた詐欺師の如き光を放っていることを駿河は知らない。

「聞こえますかー」

「……！？」

突然、駿河の後ろの壁に赤いランプが灯り、すぐ下のスピーカー

から博士の声が響く。

「……あー、テスト。被験生は、部屋に荷物を置いて一階の格納庫前に十分以内に集合。そうそう、部屋のタンスの中にM×Lサイズの着替えが四着ずつあるから、自分に合うやつを着用するように、以上！……あれ？ 桜田さん、切るときはどうするんだっけ？」

ハキハキと連絡していたはずの博士の声から急に覇気が抜けた。

「……このキューを下にやるんです」

桜田のため息がスピーカー越しに聴こえる。

「あ、そうだったっけ？」

「そうだったっけじゃありませんよ、なんであなたが知らないんですか！」

「いやあ、使うの初めてなんだよね、実は」

「だったら、なんで僕を押しつけてまでやろうとしたんですか！」

博士、保護者の方々が帰ってからやる気を失い過ぎですよ！ だいたい……」

「桜田さん、マイクマイク」

「あつ！……コホン」

博士と桜田の漫才がプツリと切れた。

「……えっと、うん。タンスなんてあったっけ？」

「無かったと思いますけど」

オニキスは辺りを見回した直後、壁の少し前に立っていたエイワスの真後ろにそびえ立つそれに目が行った。

「お、おいエイワス」

「何です？」

「お前の、後ろ……」

「……あつ！」

そこにあつたのは、木目や淡褐色が風情を感じさせる、立派な桐タンスだった。

「……いつの間に……」

二人して、タンスを呆然と見つめる。

「ええい、何でもいい、開けちまえ！」

「ですね！」

エイワスは、観音開きをそつと開けて、中の袋を取り出した。

「袋の文字は、サイズの表記でしょうか？」

「だろうな」

各々、自らの分を袋から引つ張り出した。

「これは、ライダースーツってやつかな？」

「確かに、そんな感じですね……」

袋の中から出てきたのは、全身を覆うタイプの衣服で、黒を基調にしたその二の腕や太もも、へそ等にあたる位置についた白いハード・ポイントを無視すれば、確かにライダースーツといった感じである。

「どれ、さつさと着替えるか」

「ですね」

「俺も」

「あ、あのっ！」

いそいそと上着を脱ぎ始めた三人に、駿河がもじもじしながら声をかけた。

「どうしました、駿河さん？」

「トイレか？」

「……早く着替えないと、遅れるぜ？」

オニキスの顔が、悪役然とした笑顔を作る。

「そう、僕はトイレで着替えていたいなー、って……」

駿河の指が、バスルームを指す。

「えー、それは困るなー。どうやらこれは体と一体化するみたいだから、トイレ行きたくなつた時に全裸にならなきゃならんよなー」

「だ、だったら、今すぐトイレに行けばいいだろー！」

「いやあ、今は特に尿意は無いんだよー。けど、これから不意に訪れたら困るよなー」

「あ、あう……」

駿河が、ハイエナに囲まれた草食動物の如くへたり込む。

「どうするー？」

「うう……」

オニキスが獲物でじつくり遊んでいた頃、エイワスは部屋をいそいそと出て、ロイはさつさと着替えを済ませてドアの前にいた。

「オニキスも駿河ちゃんも、そろそろ行かんと間に合わんよ？」

「げっ、そんなにまずい？」

オニキスは時計に目を移し顔を青くした後、駿河を放って着替えを始める。

「た、助かった……」

ロイは、さつきまで自分が一番変な奴だった事を知ってか知らずか、二人を変な物に対する目で見つめ、ため息をついた。

「待っててやるから……」

「いやいや、すまない」

「え、えっと僕は……」

再び駿河がもじもじし出す。確かに、何も解決していない。

「いや、見ないでいてやるから早く着替えるよ」

「……ホントに？」

駿河がオニキスに疑いの視線を注ぐ。

「嘘ついてどうする。あと、多少おふざけが過ぎた、ごめん」

「……次は無いぞ」

オニキスと駿河は、脇目も振らずにスーツを着込んだ。

「まったく、お前らな。連帯責任とかは嫌だよ？」

「……あはは……」

ロイが格納庫に視線を向かわせながらため息をつく。

「だいたい、さつきから駿河ちゃんにずっと絡んで、オニキスは男の裸を見て喜ぶ趣味なのか？」

オニキスと駿河が顔を見合わせる。

「……えっとツツコミ待ち？ あいつも今、駿河ちゃんって」

「いや、たぶん素だな。きつと、さん、君、ちゃんの分類を理解してないだけだろ」

そんな話をしていた二人をさておき、ロイは腕時計にチラリと目を移した。

「げっ」

残り二分。

ロイは、オニクスと駿河をぐいぐい引っ張った。

「オニクス、駿河ちゃんも、急ごう、時間無いぞ!」

「あ、ああ。すまない!」

「走った方がよさそうね」

三人は、力の限り走る。

「ところで、エイワスは?」

「……さあ?」

二分後、格納庫前。

「おや、皆さんお疲れですか?」

エイワスは、すでに部屋番号順の列の先頭にしれっと並んでいた。

「人間、限界超えれば窓からだって跳べるもんだね」

ロイがため息をつく。

「というか、エイワス、待ってくれてもいいだろうに……」

「いつの間にかいなくなっていたよね」

結局、三人はのこり二十秒前後で格納庫前に到着した。

「まあ、オニクス君が駿河さんをいじくり倒している頃には部屋を出ていましたからね。……あ、博士ですよ」

四人の視線が、徐々に上がるシャッターから、ペタリ、ペタリ、と響いた足音の先に向く。

「あー、お疲れさんです」

博士の気の抜けそうな声が、メガホンを通して響き渡る。

「それでは、早速ここを使って慣らし運転をしていただきますが、何か質問ある人」

エイワスが拳手する。

「……が出ないようにあらかた説明をします。……どしたの」

「いえ、なんでも」

なんだか居心地の悪そうな顔をしながらエイワスが手を下げた。

「……いらなんでしょう今の間は、絶対！」

「俺に振るなよ！」

納得いかなそうな表情をオニキスに向けたエイワスに、オニキスがツツコミを入れる。

「あー、早速これから格納庫内のIMを使ってグラウンドまで行ってもらいまーす。制限時間は特に無し、ただし……」

博士のスウツ、という吸気がメガホンで増幅されて響き渡る。

「最後に到着した五名には、機体の掃除をしてもらおう。メシ時までには仕上がらなかつたら、ご飯抜きね」

「は、博士！」

博士と一緒に格納庫から出てきた桜田が博士に怒鳴りかかる。

「どうしました」

「あくまで、彼らは実験を『受けてくれる』から 被験生 なわけであって、学校の先生と生徒とは違うのですよ!？」

「……つまり？」

言葉の意味をイマイチ理解していない博士の様子に、桜田の眉間にシワが集まった。

「つまり、そんな横暴は通りません！」

博士は、首を傾げた。

「……学校でも、体罰はありませんよ？」

「んな事は知りません！ とにかく、無茶苦茶ですよ……」

桜田のため息は、メガホン無しでもよく聞き取れた。

「桜田さん、確かさつき、 天上都市 に連絡入れましたよね？」

「……？ はい」

「向こうつちよの方々に、『どうせなら、エンターテイメントを多少盛り込んでもいいでしょうか』って確認取ったじゃあないですか。

ほら、大昔のバラエティ番組にもこんな企画が」

「これは明らかに拡大解釈ですよ！」

「いいですね、拡大解釈。大好きです、それに」

博士は桜田の話の適当に区切り、被験生達に向き直る。

「一応、忙しい軍人の方々の代わりにやってきたって名目なんだから、必死にやってもらわないとこつちが割に合いませんからね。桜田さん、いいデータ採れば手柄ですよ？」

手柄、という言葉が、桜田の頭をぐるぐる回る。

「……あんまり度が過ぎると、上に報告しますからね」

「善処します」

博士が、再びメガホンを顔の前にやる。

「というわけで、今からスタート。先に車で行ってるから、よろしく！」

博士と桜田は、いつの間にか用意されていたドーム内用の電気自動車に乗り込んだ。

「頑張つてね」

博士の気の抜けた声援が、徐々に小さくなる。

あとには、被験生およそ七十人程が残った。

「まあ、メシもかかっているし、チャツチャと済ませますか」

オニキスが格納庫の奥に向かうのを見た被験生達が後からぞろぞろと入る。

「ひゃあ、実物はでかい……」

「迫力ありますね」

オニキスとエイワスが、揃ってIMの試作量産機　タイタン　を見上げる。

「なあ、乗り込んだ後に、ヘルメットを頭に付けるのはわかるが、このハード・ポイントはどうするんだ？」

駿河が二人に問い掛ける。

「さあ、よくわからん。そのうち説明があるさ。……にしてもエイワス、中々この服はピッチリしてるよな」

「えっ？ …… ああ、確かにピッタリしてますね」

「こっちみんなっ！」

駿河は、視線を彼（しばらくは彼としておこう）に向けた二人に側にあつたスパナを当たらないようにぶん投げて、機体各所にあるタラップから上っていった。

「まあ、俺達も乗るか」

「ですね。確か、起動にはカードキーが必要でしたね。オニクス君、忘れてませんよね？」

「まさか！ んな必須品、誰が忘れるかよ、ははは……」

オニクスがカラカラと笑う隣で、ロイの顔が青くなった。

「どした、ロイ？」

「部屋に服ごと置いてきた……」

沈黙。

「おいおい、どーすんだ！ というか、何でお前が忘れてるんだよー！」

「さ、さあ……」

「……先に行きますから、早く来ててくださいね」

「うん、すまない」

起動して歩きだしたIMの間を縫いながら猛ダッシュで格納庫から出ていくロイを尻目に、二人もコクピットに乗り込んだ。

「さあて、いっちょやるか」

「ですね」

コクピット内は、いくつかの大きなパネルが周りを囲み、シート付近には思念で動くIMには必要なさげな何らかのレバーが数本ついていた。

「カードキーはさしたか！」

「はい、どうやら周りのパネルはモニターですね」

二人は、それぞれでマニュアルに書かれていた起動後の各種チェックをすませた。

「記念すべき」

「第一步！ って、うわっ」

二機のタイタンが、同時に足を踏み下ろし、何故かそこから無理矢理座ろうとし、体勢を崩してコンクリートに機体をたたき付けた。「……エイワス、大丈夫か？」

「ええ、今こいつ座りながら歩こうとしましたね」

起き上がるうと体をばたつかせていた二機を、側からもう一機が起き上がらせようとする。

「何やってんだよ……」

「ああ、駿河ちゃんか」

「助かりました」

オニキスのタイタンが単眼をつけた箱状の頭部をかく。

「しかし、こいつはこんな動きまで再現せんでも……」

「……わかった。オニキス、ハード・ポイントにチューブはさした？」

「いや……？」

「色々試したけど、どうやらコクピットについてるこれを差し込めば、頭の中の動き以外はある程度抑制できるみたい」

「そうなの？ あっ、シートの横にあったこれはそういう事か」

オニキスは、チューブの内二本を手に取る。当然、タイタンの腕もそれに続く。

「させばいいんだな！」

「うん」

「よし、まずは脚からか」

オニキスが太もものハード・ポイントにチューブをさしこむ。すると、タイタンはイメージ通りにスツと立ち上がった。

「おっ、立った、やった！ はっははは」

続けて肩甲骨、二の腕等にチューブをさしていき、ついにタイタンはまともな動きをした。

「次からは起動前にやるか、チューブ絡まったし」

「ははは、ひょっとして、博士は僕らに失敗してもらうために意図

的にこれを言わなかったのかもかもしれませんね」

既にチューブをさし終えていたエイワスが、オニキスに笑いかける。

「確かに、僕が二人に気づいた時には、まだ手こずっているのかもしれないなあ。……ところで、ロイを見かけないけど、もう行っちゃった？」

「ああ、それがあいつ……」

オニキスは、事の顛末を軽く駿河に話した。

「それは、大変だな」

「だろう？ まあ、あいつの分も頑張ろうぜ」

「助けてやらなくちゃ」

「……えっ？」

駿河の口から出た意外な一言に、オニキスは首を傾げた。

「だって、いくらなんでも可哀相だろ？ それに、走って二分、グラウンドの方が遠いくらいだ」

「まあ、な」

オニキスは「仕方ない」と心の中で唱え、乗り手のいないタイトンの右腕を引っ張り上げる。

「エイワス、手伝ってくれ」

「僕もですか？ ……わかりました、やりますよ」

エイワスも左腕を持ち上げて、「一、二の三！」の掛け声で互いに腕をそれぞれのタイトンの肩にかけた。

「ははは、酔っ払いの送迎ですね」

「確かに、ははは……」

「オニキス、エイワス君、どっちか代わるよ。言い出しっぺのわ……僕が何もやらないのも、あれじゃないか」

駿河のタイトルが近づくと

「いや、お構いなく」

「女の子に無理はさせないさ。私って言いかけてたぜ」

「……うるさいな！」

「やーい、怒った！ 逃げる逃げる！」

「ですね！」

「小学生か！」

二機のタイタンは、駿河のタイタンに追いかけられながらロイを迎えに走った。

その頃、グラウンド。

「……桜田さん」

「どうしました？」

被験生より一足早く到着していた博士が桜田に話し掛ける。

「格納庫からここまでなんて、初操縦でまともにやれる奴なんざ化け物でした」

「えっ」

「いやあ、忘れてた。ロイのデータで計算していたから、完全に失念していましたよ、ははは」

博士は特に悪びれずにへらへら笑った。

「じゃあ、どうするんですか！」

「いやあ、まいました。ははは……」

「ああ、もうっ！」

桜田の怒号が、グラウンド中に響き渡った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6167y/>

天地物語

2012年1月6日23時51分発行